



Title	北海道教育史：史料解題
Author(s)	芳賀，守雄
Citation	北海道大學教育學部紀要，2，91-102
Issue Date	1954-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28973
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P91-102.pdf



北海道教育史

—— 史料 解 題 ——

芳 賀 守 雄

序

北海道の教育において最も重要な意味をもっているのは、明治2年開拓使設置により急速に展開された移民と開拓であり、これに伴つて教育の問題も起つて参ります。移民の子弟に対する教育、開拓の推進に必要な産業技術教育、これ等を推進して行く教育計画など、今日北海道で問題となつてゐる種々の教育問題が既にこの時期から始つたと云つても過言ではないと考えます。我々は現在当面する諸問題について、その解決の糸口を歴史的研究によつて見出したいと思います。

本稿はこうした意味で始められ、第一段階として史料調査を行い、その結果を簡単に纏めたものであります。史料は教育的事実を中心に進められ、この事実が記録されているもの、及び事実を発見する手掛りとなる史料について調査しました。社会的条件に関する史料として、政治、経済、社会、文化、その他の方面にも手を広げつつありますが、これは現在纏つていません。本稿の内容について以下簡単に説明を加えます。

- (1) 解説は主要な史料のみに附した。
- (2) 本稿は3部よりなり、Ⅰは江戸時代の史料、Ⅱは開拓使時代及びその前後として維新後明治19年頃までの史料、Ⅲは郷土史その他であるが、これは今後の研究指針として補助的意味で扱つた。
- (3) 史料の分類は統一的になされていない。これは史料の性質が各時代毎に違つてゐる事と、内容が色々の分野にまたがつてゐるからである。
- (4) 史料は次の順序で記載した。
史料名、著者名、所蔵場所（Ⅲには書かない）、下段に説明を附した。
- (5) 略称は次の通りである。

道＝北海道庁、道図＝道立図書館、函図＝函館図書館、北文＝北方文化研究室、北大＝北海道大学

I. 江戸時代

a. 藩 費・寺子屋関係

松前福山諸掟

北 文

本史料は松前藩に於ける諸掟、触書を含む。教育政策が断片的に示されている。

日本教育史資料 第4巻 旧松前藩

北 大

明治16年、松前修広（第19代松前藩主）によつて家臣の報告及び焼け残つた文書を基礎として文部省に報告したもので、現在に於いては藩の教育を調査する唯一の手掛りとなるものである。

日本教育史資料 第8巻 函館県寺小屋

北 大

名称、学科、旧管轄、所在地、開業年月日、廃業年月日、男女教師数、男女生徒数、調査年代、

身分、習字師氏名、などについて、明治16年文部省の依頼によつて函館県で調査報告したもの。

蝦夷錦血潮之曙 下国美都喜著

北 文

松前藩士の教育に関して断片的ではあるが記録されている。藩士本州游学の状況も研究の手掛りとなる。写本多数あり。北方文化資料室のものは蠣崎敏氏の加筆したもの。明治3年著す。

奉命日誌 下国安芸著

北 文

明治元年7月29日より同年9月29日に至る間、正義隊士による藩政改革後、家老として藩政に参与した時の日誌で教育政策及び制度化の動きが記録されている。

松前家臣履歴書

松前町・長田氏蔵

明治16年宮内省に報告の為藩主より家臣に報告させたもので、藩士の教育状況が断片的に記録されている。

白文孝経（一名松前孝経）

函 図

以活字梓発焉、不許翻刻、子里必窮、白文孝経、松前微典館、とあり。

荒井金助事蹟材料 永田方正編

道

永田氏の調査せる史料で、荒井金助安政4年学館を石狩に創立して、教導館と称した。教導館についてその内容が記されている。

松前御城下讃書（寺社巡尽）

小樽市・有明氏蔵

商用の手紙文を子供の手習の為に書写したものである。北海道に於ける往来物としては最初のもの。嘉永5年。

函館往来 松浦武四郎著

道

所謂「往来物」として北海道に於いて作られたもの。これがどの程度使用されたかは現在不詳。安政3年。

寺子教訓往来 小桝ちよ著

北 大

奥平家文書の内。寺子屋に於ける禮儀作法について手習本として書いたもの。

学 規 国泰寺住職著

国 泰 寺

国泰寺境内に私立学校を設立し、その規則を書いたもの。年代不詳なるも明治初年に書かれたものと考えられる。

b. 心 学 関 係

諸用日記 西川晩翠手録(註1)

函 図

自嘉永3年11月19日至安政4年2月29日 晩翠の手録日記で、武州金沢発足より、5月9日函館着、7月25日出立松前に到る。この間に於ける講話、道中諸事について記す。

法名帳 同 上

函 図

藩主（因伯）及び家祖一族並に松前函館心学社中法名、俗名、辞世など記す。

心 学 書 同 上

函 図

心学道話 同 上

函 図

心学集草 同 上

函 図

心学集諸用写 同 上

函 図

心学見聞書	同 上	函	図
聖賢古言道歌集	同 上	函	図
道歌集（弘化2年2月写）	同 上	函	図
童観鈔卷	同 上	函	図
朱文公心学録（心学聖賢古語集）	同 上	函	図
道歌集いろは引	同 上	函	図
中庸論語	同 上	函	図
古事抜出（大黒天人相考，仏道教経）	同 上	函	図
由良開山法燈国師法話	同 上	函	図
諸賢語集	同 上	函	図
告志篇松平将監頼信記	同 上	函	図
羽州庄内鶴岡五日町鶴鳴舎社中（門人帳）	同 上	函	図
女敵討物語	同 上	函	図
心学見聞雑録	同 上	函	図
三教正宗 厚見道純著（八尾市兵衛・京都）元禄2年		函	図
各巻の見返しに「西川」の自署あり。			
西川晩翠法名並辞世（一幅）		函	図
「松原院忠譽善巧居士，因州鳥取産西河晩翠源守孝花押」「誠より生れ来りし我なればまことに終に舎の主なり」とあり。			
西川晩翠墓塔（写真）		函	図
函館称名寺塋域内，安政六年五月建之。因州鳥取産，西川晩翠墓と刻せる写真と辞世を模写せる短冊を添う。即ち「かりの世にかりの命に仮の身を入用次第返済をする」。			
松代伊兵衛伝 ^(註2)	佐藤慎策編	函	図
大日本名譽録の内。明治21年。			
松代伊兵衛翁肖像（写真）		函	図
渋田利右衛門氏雑考 ^(註3)		函	図
渋田利右衛門伝記資料。新聞「北海」の記事抜書き。			
渋田利右衛門挿話	吉本 襄著	函	図
海舟先生続氷川清話2—8。明治31年。			
渋田翁雑録	渋田利右衛門記	函	図
折にふれ感じた事を書きつけたもの。			
渋田家由緒書（卷子本）		函	図
渋田利右衛門之書		函	図
芝蘭生於深林不似無人而不芳（松齋閑人），身一則百禄至家一則六親和（如泉）			
心学文集 再版	中江藤樹・熊沢蕃山著	函	図
渋田利右衛門手沢本。「松前箱館渋田蔵書」の蔵印あり。巻頭渋田利右衛門に関する行状を記す。			

下山仙庵の手になると云う。

和歌よみ方記

函 図

「松前箱館渋田蔵書」巻頭に「箱館御役所」の蔵印あり。

誠終舎篇額^(註4) 堀 織部正筆 1面

函 図

忠孝仁義禮智信 堀 織部正筆 3幅対

函 図

誠終舎蔵書印 1個

函 図

誠終舎用見台（携帯用箱型組立見台）1組

函 図

誠終舎備付制度用鞭（古弓の折）1本

函 図

誠終舎用木鐸？ 1組

函 図

誠終舎備付儉飧（蓋付本箱）1個

函 図

五倫名義解 空谷茂潤編

函 図

「宗谷御用所」の発行になつている。室鳩巢の「五倫名義解」を鄙野の小民をして輟耕のいとまに読まして人倫の大道を教えようとして出された事が記されている。宗谷御用所とあるが、現在他に手掛りなし。

代島剛平履歴及行状 代島元聖

函 図

「明治26年11月27日、故剛平実姪分家、北海道函館区天神町70番地、北海道士族正八位、代島元聖[㊤]、明治27年1月中教正ヲ贈ラル、大正7年2月8日、剛平女、代島チセ[㊤]。」となつてゐる。元聖及びチセの報告書。

c. 蘭学及び語学関係

竹塘武田先生伝附詩鈔^(註5) 水野行敏著

函 図

武田竹塘先生紀功碑（写真）

函 図

別に明治17年4月16日書、石川良信撰文。

黒龍江誌

函 図

文久元年箱館奉行支配調役水野正太夫、諸術調所教授武田斐三郎、以下官船亀田丸に便乗し、黒龍江に至り、航海測量術を習練し、交易を試み、各地の形勢を視察したる復命書。

黄浦誌（長崎高等商業学校研究館年報第5年第2冊別刷）

函 図

元治元年箱館奉行属吏の上海視察記で、当時の乗組員の多くは竹塘先生の指導した人々である。

武田斐三郎肖像及詩文（写真）

函 図

武田蔵書

函 図

黒龍江記事、土地棟選に関する開申、信敬艦に関する建議、武田成章伝及紀功碑、履歴を含む。

ろしやのいろは 初版 イワン・マホワ著

函 図

箱館駐割露国領事館最初の司祭イワン・マホワの著。箱館の常木重吉の手により上木す。萬延2年。

和魯通言比考 初版 ゴスケウイツチ著
橋 耕 齋 補

函 図

和魯通言比考緒言 附ろしやのいろは解題 ゴスケウイツチ著
渡辺外四郎訳

函 図

露国創刊日露辞典及其編纂者 亀田次郎著

和魯通言比考の解題で国学院雑誌第29巻第11号抜刷。

d. 其 の 他

休明光記 羽太正養著 (新撰北海道史 第5巻)

「蝦夷御処置の始末、其大綱を後世に伝へむため」に書かれたもので、寛政11年より文化4年に至る蝦夷地処置の顛末を記す。附録として公文書を収む。羽太庄左衛門正養は寛政11年蝦夷地取締御用掛となり、享和2年蝦夷奉行、次いで箱館奉行、松前奉行となり文化4年逼塞となる。教育政策の面から重要な史料である。

蝦夷地御開拓諸御書付諸伺書類 (新撰北海道史、第5巻)

蝦夷地開拓の経過を文久2年老中水野和泉守忠精の命により、糟谷筑後守義明によつて意見書並に蝦夷地開拓の経過を編んで奉つたものである。教育面では諸術調所に関する記録がある。其の他政策に関しても重要な意味がある。

Ⅱ. 開拓使時代及びその前後

a. 北海道全般に関するもの

開拓使日誌 開拓使編

北 文

明治2年より10年に至る間、開拓使に於いて時々印刷した日誌を合綴したもので、御沙汰書、布達、伺書、指令、上申、届、任免、建議などを収む。7冊。

開拓使事業報告 第4編、開拓使編

北 文

明治2年置使より、同15年廃使置県に至るまでの事業を、各部門、年月の順に記録す。教育は第4編に取扱われ、全道の教育に関する概略を説明し、学事成績一覧として各年度毎の統計(全道及び各支庁)があり。次いで専門、普通に分類し、各学校別の設立から明治14年に至る経過が、統計と年表によつて記録されている。

開拓使事業報告附録 布令類聚、開拓使編

北 文

明治2年より同15年に至る間の布達、達書、を類別編纂す。教育に関するものは上下2冊の中下巻に収められている。

開拓使顧問 ホラシ・ケブロン報文
ホラシ・ケブロン編 開拓使外事課訳 (新撰北海道史 第六巻)

ホラシ・ケブロンは明治4年から同8年まで黒田開拓使次官にアメリカより招かれて開拓使の顧問となり同国の技師を指揮して開発の計画及び実践に多大の貢献をした。この報告は各技師の報告及びケブロン自身の意見を最後にまとめて提出し、それを開拓使に於いて訳したものである。この報告書は教育政策に裏付を与えるものとして重要である。原文は、

Reports and Official Letters to the Kaitakushi, by Horace Capron, Commissioner and Adviser, and his Foreign Assistants.

TOKEL. published by the Kaitakushi. 1875.

となつている。明治12年2月開拓使刊行。

北海道志 開拓使編

道

25冊よりなつている。本書は沿革に留意して書かれている。「政治」の項で学校が全般的に述

べられている。開拓使事業報告と対比して見る必要がある。

北海道地誌要領 開拓使編

道

明治7年12月、開拓使が印刷した地誌で疆域、郡数、戸数、人口、歳額、治所、学校、駅など数項に分け記述されている。

小学生徒心得 開拓使編

同 掛図

開拓使に於いて出版されたものと考えられるが現在不明。(開拓使の出版目録には記載されている。)明治14年刊行となつている。

北海通誌 宮村直義編輯

函 図

北海道に於ける最初の雑誌。学校開設の事情が断片的に記されている。函館、北浜社内自邇社発行。明治12年4月。

北海道教育会雑誌 大前正雄編

函 図

明治24年3月創立された北海道教育会、(会員600名)の機関誌で毎月1回刊行。官令、叙任辞令、本会記事、論説、教育(教授法)、通信、雑録、雑報、その他諸報告が記載されている。本誌以前にも函館教育協会雑誌、札幌教育会彙報、松前教育会雑誌が発行されている。

北海道学事新報 北海道学事新報社編

函 図

函館より月2回刊行。学事沿革、教育協会報告、学校行事、其の他教育関係記事。明治14年発行。

函館師範学校第一年報 函館師範学校編

函 図

明治8年1月から同17年12月に至る間の沿革、諸規則、職制並事務章程生徒の概況、卒業生徒姓名録、職員録など記す。

道庁時代学校 道史編纂掛編

北 方

明治19年以降の学校関係資料を集む。道史編纂の際に使用したもの。

b. 各地域に関するもの

函館県区小学校沿革史

函 図

明治16年文部省の依頼によつて調査が進められた折の資料で、彌生、宝、住吉、東川、高砂、鶴岡、函館女学校、若山、吉川、一貫堂、森、辻、浅井、藤村、沢、の各小学校の沿革史。各校主より報告せしめたもの。

内濶学校及其女生徒(写真)

函 図

校舎は杉浦嘉七がその住居を寄贈。明治9年開校。

官立会所学校(写真)

函 図

明治8年4月開校。教員17人、生徒男子97人、女子37人、明治11年写す。

公立松陰学校(写真)

函 図

明治9年2月開校。教員12人、生徒男子206人、女子66人。明治11年5月写す。

私立鶴岡小学校(写真)

函 図

明治10年12月開校。教員2人、生徒男子47人、女子11人、明治11年写す。

公立常盤学校(写真)

函 図

明治11年2月開校。教員7人、生徒男子108人、女子53人、明治11年5月写す。

公立住吉学校（写真）

函 図

明治11年2月開校。教員2人、生徒男子38人、女子22人、明治11年5月写す。

彌生小学校（写真）

函 図

明治15年4月9日開校当日の写真。

対雁学校開校式写真

道

明治11年1月、樺人より移住したアイヌ人の為に学校を設けた。これが対雁学校で、アイヌ人の為の学校として最初のもの。

余市郡沢町学校（写真）

道

明治6年開校。同10年新築。

御鋒内学校（写真）

道

明治7年開校。同13年新築。

御鋒内学校泊分校（写真）

道

明治9年開校。同12年新築。

七重学校（写真）

道

明治10年新築開校。

札幌表御取建学校三階建繪図面

北 文

女学校講堂並教師館繪図

北 文

男子校繪図

北 文

明治6年7月函館市中教育一覧

函 図

函館学校概要、函館病院医学所概要、函館市中手習師匠並算学者一覧などを含む。

杣沢村寺小屋取調表（生駒家文書の内） 新井田文次郎

函 図

明治16年日本教育史資料編纂の為に依託した調査の控。上磯郡第5学区学務委員。

錦耕商売往来 全

江差町・高橋兵市氏蔵

文久二壬戌年六月再版、地本繪問屋、江戸馬喰町二丁目、山口屋藤兵衛板。とあり。高橋兵市氏江明学校に学んだ折使用したもの。江明学校は旧松前藩士徽典館教授尾山徹三が開設したもの。

明治7年。

孟子

江差町・高橋兵市氏蔵

東京書肆、東都荒川東山先生正校、下谷広徳寺前、和屋庄次郎。馬喰町四丁目、吉田屋文三郎。とあり。高橋兵市氏江明学校に学んだ折使用したもの。

禮記

江差町・高橋兵市氏蔵

官許、菊間藩蔵版、明治三庚年八月、東京書林、馬喰町四丁目、吉田屋文三郎とあり。高橋兵市氏江明学校に学んだ折使用したもの。

門弟名前出（門弟控） 藤枝政光

江差町・藤枝家蔵

表紙の次の頁に「門弟控天保八丁酉年五月政光改之」とあり。門弟名前のみ記録す。

国学入門（2冊）

上ノ国村・松崎岩穂氏蔵

「皇学会」の印及び「藤枝政廷、古軍郡真直、本多政行、関川常住」の署名あり。

御誓文大意 三島神社蔵版

ヒノ国村・松崎岩穂氏蔵

前記国学入門と同様の署名あり。

手 習 帳 (手本)

江差町・井野テヨ氏蔵

井野重太郎江明学校(後に鷗島学校に改称。明治7年設立。明治12年改称。但し同11年は休業)に学んだ時に、手本として書き与られたものを集めたもの。「いろは」より「何々尽」と始つて行く。

江明学校学籍簿

江差町・築瀬仁右衛門氏蔵

江明学校生徒氏名のみを記す。

札幌県学事第一年報	(明治15年)	札 幌 県	道 図
同 第二年報	(明治16年)	同	道 図
函館県学事第一年報	(明治15年)	函 館 県	道 図
同 第二年報	(明治16年)	同	道 図
同 第三年報	(明治17年)	同	道 図
同 第四年報	(明治18年)	同	道 図
根室県学事年報第二回	(明治16年)	根 室 県	道 図
同 第三回	(明治17年)	同	道 図
同 第四回	(明治18年)	同	道 図
札幌県教育 道史編纂掛編			北 文

北海道史編纂の為蒐集した資料で教育行政面に關するものが主である。

函館県教育 道史編纂掛編	北 文
根室県教育 道史編纂掛編	北 文
小学校生徒心得 函館県学務課編	函 図

第1条「父母は我れを生み、我れを育てし者なれば須臾も孝順の心を失ふべからず」の項から第24項に至る。

道庁時代学校 道史編纂掛編	北 文
---------------	-----

明治20年以降道庁時代の学校関係資料を集む。

Ⅲ. 道内各地郷土史(註6) その他

a. 郷 土 史			
日高国志科沙流郡之部	御子柴五百彦著 明治25年	小樽港史	高畑宜一著 同32年
北海道人物誌(2冊)	岡崎官次郎編 同26.7年	北海之新天地上川沿革	御子柴五百彦著 同32年
北海道寺院沿革誌	星野和太郎著 同27年	江 差	川竹駒吉著 同34年
岩内古宇二郡誌	桂 源 五著 同27年	上川発達史	鈴木規矩男著 同36年
北見事情	神田芳太郎著 同29年	十 勝 史	酒井章太郎著 同40年
上川案内 鉄道開通式協賛会上川支部編	同31年	東旭川史	武田 弘編 同41年
札幌沿革史	札幌史学会編 同32年	上富良野志	笹森 敬著 同42年
函館沿革史	福岡武次郎著 同32年	釧路築港史	石川忠一郎著 同42年
		深川村発達史	二宮惟一編 同42年

9

由仁村郷土誌	空知教育会支部編	同9年
深川風土記	中井哲太郎述	同9年
豊頃村郷土誌	教育研究会編	同10年
心の碑	吉田 巖著	同10年
北海道地方政党盛衰記	谷村金次郎著	同10年
和寒村沿革概誌	丹野 嶽二著	同10年
北海道工業年表	川島 享三著	同10年
釧路郷土史考	佐々木米太郎著	同11年
新琴似兵村史	佐々木俊郎著	同11年
松前史物語	笹谷常咲著	同12年
夕張町史	夕張町役場編	同12年
美幌町史	美幌町役場編	同12年
北海道土功組合史	土功組合聯合会編	同13年
札幌狸小路発展史	松内保太郎著	同13年
和田村史	和田村役場編	同13年
当別村史	当別村役場編	同13年
美唄町史	滝 昇之助著	同15年
苫小牧町史	苫小牧町役場編	同15年
角田村史	丹野 嶽二著	同15年
歌笛開村五十年史	三石村役場編	同15年
滝川町発展史	坂東幸太郎著	同15年
砂川町史	小山内 克 編	同15年
上川発達史	鴻上 覚一著	同15年
道政七十年	上 畠 彦蔵著	同16年
高島町史	樋口忠次郎著	同16年
室蘭市史	室蘭市役所編	同16年
東旭川五十年史		同16年
北海道文化史考	札幌中央放送局編	同17年
月形町史		同17年
紋別町史	塩見為紀治著	同19年
b. 通 史		
北海道史 第1巻	北海道庁編	大2年
北海道史 上	同 上	同7年
北海道史 附録地図	同 上	同7年
北海道史要	竹内運平著	昭8年
新撰北海道史(7巻)	北海道庁編	同12年

c. 人 物 伝

北海道医事通覧前編	附 医家小伝	
	永沢菊太郎著	大2年
天塩沿岸の面影	川村繁之助著	同3年
北海道人名辞書	金子郡平著	同3年
札幌の人	高野隆三著	同3年
北海道百大商店	北海道実業編	同3年
函館商工案内 上	千葉稲城編	同4年
北海道銀行会社大商店辞書	金子郡平編	同5年
	金子信尚編	
北海道婦女善行録		同6年
庁立高等女学校々友会編		
北海道開拓功勞者旌彰録	北海道庁編	同7年
光沢上人北海道開拓事蹟概要	伊藤祐覚著	同7年
北海道拓殖功勞者列伝	小田孤舟著	同10年
北海道開発事蹟	高橋理一郎著	同10年
函館及函館人	大橋富一郎著	同11年
旭川十傑	山崎有信著	同12年
十勝宝盟鑑	千枝与右衛門著	同14年
人物評論第一編	荻田政徳著	同15年
東北海道の人物	渡辺源四郎著	同15年
本田親美翁	山崎有信著	昭2年
北海道市町村総覧		同2年
自叙伝 我が記憶をたどりて	ジョン・パチエラー	同3年
現代札幌人物史	杉山 潔編	同6年
北海道と島根県	札幌島根県郷友会	同6年
岩村通俊伝	片山敬次著	同8年
空知銘鑑	真田富五郎著	同9年
北海の太閤 木下斗南		同10年
北海道の新聞と新聞人	和田藤吉著	同10年
北海道と九州人	佐藤一雄著	同10年
人物覚書帳	茶碗谷徳次著	同11年
堤清六の生涯	内藤民治著	同12年
北海道農業開拓秘録	若林 功著	同15年
中川五郎治と種痘伝来		同18年

後 記

現在研究中でここに取扱うことの出来なかつた史料が多数あります。特に札幌農学校をはじめ高等教育、中等教育に関する史料、教育内容、教育方法、教育思想、などに関する個々の具体的な史料は今後の研究として残されています。史料調査に当つては各地の郷土史研究者や教育関係の方

方の御支援を戴きました。又城戸幡太郎先生、鈴木朝英先生には研究上色々御指導を御願い致しました。厚く御禮申し上げます。

註

- (1) 西川晩翠守考、鳥取藩士松原藤八郎の次男、嘉永4年5月5日函館に来り、函館、松前に於いて各所に講話す。諸用日記に依れば「7月16日社中惣寄合松栄講と題して仕法相定毎月1、6の日は道話」とあり、1、6の日に以後道話を講じ、且つ連日商家その他に於いて個人的に道話を行つた記録がある。嘉永5年6月2日函館を去り、安政3年6月5日再び函館に来り、前回同様定席を開いて道話を講じた。安政4年道場を新築したが落成を待たず、同年4月9日逝く。称名寺内松代家墓地に葬る。奉行堀 織部正自ら「誠終舎」と命名し、これを書し与えた。協力者として代嶋剛平。波田利右衛門、松代伊兵衛あり、心学の普及は宗谷御用所より出版された「五倫名義解」が存する事によつても如何に遠くまで及んだかが知られよう。
- (2) 松代伊兵衛、文化5年9月20日箱館弁天町に生る。資性温厚質実慈善の長者して名主、頭取、町年寄、大年寄等を歴任し、又心学の道場を建て、西川晩翠を聘して大に教化に努む。明治19年、悪疫流行の際之が防圧に尽瘁し遂に其職に倒る。時に9月3日。享年79。(函館郷土史目録)
- (3) 波田利右衛門、箱館弁天町の人、幼名和吉、代々利右衛門と称し如泉は其号なり。幼にして読書を好み蔵書万巻を以て知らる。後松代伊兵衛と図り庶民教化の爲め心学道話の師西川晩翠を迎へて松栄講を起し又自ら講説す。安政5年12月4日歿す。年43。高龍寺に葬る。(函館郷土史料目録)
- (4) 誠終舎は北海道最初の心学道場にして、安政3年市民松代伊兵衛、波田利右衛門等の創始する所なり。時の箱館 奉行堀織部正利熙其美筆を讀し誠終舎の3字を撰書して贈る。即ち本額なり。(函館郷土史料目録)
- (5) 武田斐三郎成章、竹塘と号す。文政10年9月15日伊予国喜多郡大洲に生る。山田東海、緒方洪庵、伊東玄朴に学び音韻学、蘭学、英仏学を修む。安政元年、堀織部正、村垣与三郎に随つて渡道、安政3年箱館奉行支配諸術調所教授となり倉密、航海、測量、冶金などを教授す。一方弁天崎臺場及び五稜郭土塁、尻岸内熔鉄炉の建設に従事し、且つ大小銃及び弾薬の製造を行う。元治元年離道、開成所教授、大砲差図役頭取となる。維新後、松代藩に招かれて士官学校を創立し、後兵部省に出仕、陸軍大佐兼兵学大教授となり、士官学校学科提理、兵学寮幼年学校長など歴任し明治13年、疾に罹つて歿す。年54。
- (6) 郷土史に見られる一般的傾向として、史料の厳密な批判がなされていない為に史実が誤つて記録されたり、可成り微視的な見方から史実の取上げ方に妥当性を欠く憾みがあります。敘述に於いても人物と事件に終始して、大きな動きが閑却されている。など種々難点がありますが、必要に応じて批判検討を加える事によつて新しい意味をもつて参ります。一方私達の研究が中央の事実に局限され勝ちであります、これを救つてくれるのは郷土史にある様々な型で書かれた事実です。Ⅰ、Ⅱの補足の意味で戦争前までに出版された郷土史を載せて置きます。

参 考 文 献

- 函館郷土史料目録 岡田健蔵編 函館図書館発行 昭和11年
 北海道史料所在目録 第1集 北海道総務部行政調査課編 同課発行 昭和26年
 北海道史料所在目録 第2集 北海道総務部行政調査課編 同課発行 昭和26年
 北海道史料所在目録 第3集 北海道総務部企画室編 同室発行 昭和27年
 北海道出版小史 高倉新一郎著 日本出版協会北海道支部発行 昭和22年
 函館教育史年表 神山 茂編 函館教育会発行 昭和13年
 北海道教育沿革誌 北海道庁内務部兵事課編 同課発行 大正7年

本書は年代記的に書かれたものであるが、現在まで教育について書かれた本道唯一のまとまつたものである。本書で引用した文献として次のものが挙げられている。文部省布達全書、大蔵省開拓使事業報告、大蔵省編帝国年鑑、北海道誌、札幌区編札幌区史、函館師範年報、函館県学事年報、札幌県学事年報、根室県学事年報、札幌農学校年報、東北帝国大学農科大学一覽、小樽商業学校一覽、北海道庁統計書、北海道教育令規、荒甚三郎編北海道小誌、庁立学校々籍簿、私立学校々籍簿、北海道庁教育に関する各種記録、北海道教育会雑誌北海之教育、庁立学校々友会等の会報類。

新撰北海道史 北海道庁編 同発行 昭和12年

1年巻は通史, 2巻は幕末まで, 3巻は開拓使時代とその前後, 4巻は道庁時代, 5巻は幕末に至る間の主要史料, 6巻は明治以降主要史料, 7巻は年表統計索引。教育に関するものは各時代毎に簡単に取扱っている。文化史の中に含めて考えている様である。

SUMMARY

A bibliographical survey on the history of education in Hokkaido

by Morio Haga

It may roughly be acknowledged that specific research, covering various areas, on the status of education in Hokkaido has brought fruitful results for future educational planning and its management.

An over-all research programme, however, would be more successfully achieved, if a historical survey on each subject were skilfully carried out as a back-ground study.

The writer set up as his first step in this problem a collection of the fundamental historical materials on educational affairs in Hokkaido to ascertain the usefulness of past experience in planning.

Periods this study covers :

I 'Edo' period (65 volumes)

II 'Kaitakushi' period or thereabout (60 volumes)